

歌舞伎『勸進帳』の成立



歌舞伎『勸進帳』の公演 平成16年3月20日県こまつ芸術劇場うらら。武蔵坊弁慶の十二世市川團十郎、富樫左衛門の十世坂東三津五郎、源義経の七世中村芝雀。義経打擲のあと、打ち刀を抜きかけて気負い立つ四天王を弁慶は金剛杖で抑え、富樫は刀に手をかけてつめより、双方勇みかかる一触即発の場面。(協力：松竹株式会社)

歌舞伎は人形浄瑠璃の影響をうけて、元禄期(一六八八〜一七〇四)以後大衆演劇として発展した。

歌舞伎のうち能『安宅』の趣向を取り入れたものとして、元禄十五年二月、初世市川團十郎が自ら脚本を書き荒事の弁慶を演じた『星合十二段』を始め、安永二年(一七七三)十一月、二世市川海老蔵が人気役者を揃え歌舞伎史上屈指の組織となった大一座の顔見世狂言の『御撰勸進帳』など、江戸期には十指をこえる演目がある。

『勸進帳』は天保十一年(一八四〇)三月、江戸河原崎座で「歌舞伎十八番の内」と銘

うって初演された。天保十一年は元祖市川團十郎の生誕一九〇年にあたり、



『壽勸進帳』(名古屋市 御園座演劇図書館所蔵) 安政4年(1857)1月、大坂中の芝居番付。五世市川海老蔵(七世市川團十郎)の上方での『勸進帳』初演時のもの。海老蔵の武蔵坊弁慶、初世尾上幸蔵の源義経、四世市川鍛十郎の富樫左衛門。



歌舞伎十八番の内 勸進帳錦絵。豊原国周筆 明治時代(東京都 早稲田大学演劇博物館所蔵)
富樫左衛門・初世市川左団次 弁慶・九世市川團十郎 義経・四世中村福助

取り越して市川家二〇〇年を祝う記念興業として、七世市川團十郎が能『安宅』に拠って新作させたものである。上方で三味線と能を結びつけた「泉祐能」を七世團十郎が知り、これが制作の動機になったともいわれる。この三味線と囃子にのった長唄は、情感溢れる名曲である。舞台は能にならって松羽目とし、当時講談で流行していた「山伏問答」を取り入れて、竜虎相うつ緊迫感を高揚させる。明治になって、九世市川團十郎は生新の気を盛りこもうとさらに能に近づけて改編し、弁慶の精緻な演技など極めて洗練された高雅典麗な所作事となっている。

『勸進帳』は能の歌舞伎化ではあるが、能『安宅』とは全く異なった趣きがある。『安宅』では、宗教的示威や武力の誇示、氣迫で富樫を圧倒し関を通るのに対し、『勸進帳』では、弁慶の智力と勇氣をふるい命を賭けて主君を守る忠義と苦衷に、富樫は強く心をうたれ、ひたすら忍耐する義経の悲運に同情し、源頼朝から責任を追及され



石川県指定史跡の安宅関址の一画に建立された、源義経・武蔵坊弁慶・富樫左衛門の銅像
台石の「智仁勇」の題字は永井柳太郎の揮毫。

ることを覚悟の上で、一行の通行を許す仁愛と心意気が印象強く描写される。『勸進帳』は、歌舞伎を代表する感銘深い名作として、現在もなお上演頻度は極めて高い。
(清水郁夫)